

三者の在世時代が約一紀の隔絶あるを思はねばならない。かゝる時代様式の間隙と筆者各々の特性の相異とが、同じ琳派の書系中、特に同一畫圖に於て認得されると云ふことは、史的興味の盡きざるものと云へよう。

尙本圖の製作期に就ては、嚮に本誌第五十九號の徳川伯爵家藏抱一筆風雨草花圖解中に於て指摘した如く、化政年間抱一晩期の作と推せられる。而してひと度宗達や光琳畫の聯想を離れ、本圖を單獨に對看すれば、その畫致の華麗にして、その描線の柔婉なる、その色調の鮮明なこと、また抱一一代の秀作と推稱するに足るものがあらう。

## 觀音菩薩像

解説

大 邱 市田次郎氏藏

數多き朝鮮小鍍金佛中に問題なく最優品にして周知の名作である。加之、本像は明治四十年扶餘附近窺岩面より庭瀨氏藏銅造觀音立像と共に出土したことが知られて居り、はつきりと證據ある百濟佛としても標準作の一つである。總高八寸七分、臺座は失はれて居るが兩足の乗る蓮肉の部分は直径二寸二分である。像全體に綠鏽が湧いては居るが、謂ゆる青金だちの良質の鍍金今なほ燦然と輝き、最も見事である。

この像は鑄出極めて嚴正にして、寶冠、顔の目鼻立ち、瓔珞、皺等しのぎが立つばかりに鋭どく、一見清爽にして雋秀なる感じを與へて居る。然しながらよく見ると鋭さと共に異常なる柔か味が含まれて居て、例へば、頬のあたりの肉づけ、兩肩に分れて垂れ懸る毛髮、前につき出して物を摘まんとするが如き右手のふくらみと指のしなやかさ、水瓶をさげた左手、何れも極めてやさしいものである。それ等にもまして像全體に言ふに言へぬ人間味を與へるものは、腰のひねりである。嚴格すぎるほどに澄むだ菩薩の神性を裏切つて女性の本能

的なる艶かしさが現はれたかのやうに、このなよなよとした曲線美の姿勢は魅惑的である。

この鋭どさと優しさとの交錯が、本像の年代を決めんとする考察に或る矛盾を提出するかに思はれる。是は普通には三國時代百濟の製作に歸せられて居る。百濟は初唐の高宗の時、日本でいへば天智天皇の時代に亡ぼされ、それ以後首都は荒廢して高貴なる佛像の製作などはあまり行はれ得なかつたに相違なく、それ故に本像を三國時代に歸することは史的事情として一應妥當と思はれる。

然しそれにしてこの像を斯る比較的早い時代に配するにしては、像の持つ特有なるしなやかさで行きとゞいた寫實の技巧とは、支那朝鮮日本に通ずる彫刻の様式史に照し見て、多少進み過ぎて居るかの感を與へる。女性的なる腰のひねりなど、隋時代には既に見出されるけれども、本像程に顯著なるものは、唐も餘程進んで後でなければ現はれて來ない。斯くの如き様式上の困難を解かんが爲めの一つの解釋は、百濟の地には新羅統一時代に入りてもなほ引續き佛像の製作が行はれ、艶麗なる唐朝藝術の影響を受け容れて斯くの如き像をも作つたかと想像することが一つ、然しながら今一つの更に重要な解釋は、百濟は支那南北朝のうちでも主として南朝の影響を受け、特に梁と深き文化的關係を持つて居たので、或は支那南朝系佛教美術の特色を反映し、斯くの如き北朝系の様式發展としては多少不合理と思はるゝほどに早熟なる優美さを示したかと考へることである。吾人の支那六朝彫刻史に關する知識は殆ど北朝系の製作に限られて居ることは、この問題の解決に甚だしき不便を與へて遺憾であるが、南朝系の美術が今少しく闡明にされたならば、之を取り入れた百濟の佛像とは斯くの如きものかと案外不思議でないのかも知れぬ。この優美さを除いて考へれば、本像の製作全般に現はれたる鋭どさ、良質の鍍金等は正に六朝的特色を持ち到底新羅統一以後の時代には歸し難く、それ故に茲には第二の解釋を支持して、將來百濟佛の研究の一層進まんことを庶幾ふほかはない。

それと同時に之に關聯して更に望ましきは六朝時代南朝、特に梁の佛教美術

觀  
音  
菩  
薩  
像

大  
邱  
市  
田  
次  
郎  
氏  
藏

調査の進歩である。梁の佛教美術に重要なものは、武帝による熱心なる佛教の興隆によつても想像するに難くなく、且つ梁の美術が單に百濟のみならず、我が日本に對しても關係深きは、推古朝の名匠止利佛師が梁より百濟經由に日本に渡來した司馬達等の孫と言はるゝによりても推察される。梁の佛教美術が今少しく明らかにさるゝならば、百濟美術の本質が理解し易くなるばかりでなく、また日本美術の淵源を尋ねる上にも據り所を得てその慥かさを増すること、蓋し多大であらう。

## 美術研究所時報

### 寄贈圖書

探幽(東洋美術文庫)	野田九浦氏
新支那の指導精神(啓明會第八十九回講演集)	啓明會
苔衣	育徳財團
志野黄瀬戸	森川勘一郎氏
啓明會第廿回事業報告書	啓明會
日本美術略史	帝室博物館
史蹟名勝天然紀念物一覽(昭和十四年度)	文部省
大雅堂を中心に(三)	人見道氏
金剛界大日如來繪像	玉井久次郎氏
京都の彫刻	京都市役所
書道	八ノ五、六
國寶	二ノ五、六
美術世界	三ノ五
美術育	一五ノ五
圖書と手工	二三八
文部時報	六五一、六五三
學校美術	一三ノ五、六
白晝	一三ノ四、五

鍍金觀音菩薩像

一一一

最高美術	八ノ五	南畫鑑賞	八ノ四
圖書館雜誌	二三四	美術眼	三ノ五
美術	一四ノ五	貨幣	二四二
新建築	一五ノ四	思想	二〇四
文學	七ノ四	史迹と美術	一〇ノ五
美術殿	七ノ五	大正大學々報	二九
燒ものの趣味	五ノ五	みづゑ	四一三、四一四
國際建築	一五ノ五	畫室	六ノ五
アトリエ	一六ノ五	日本建築士	二四ノ四
畫說	二九	茶わん	一〇一
美術街	六ノ四	建築世界	五ノ三三
工藝ニュース	八ノ五	史學研究	一〇ノ三
美之國	一六八	塔影	一五ノ五
藝術日本	七ノ四六	汎工藝	一七ノ六
建築雜誌	六五〇	教育美術	五ノ六
British Museum Quarterly, Vol. 13, No. 1			
Museum of Fine Arts, Boston, Annual Report, No. 63			
Bulletin des Musées des Rayaux d' Art et d' Histoire, No. 6			
Bulletin of the Art Institute of Chicago, Vol. 33, No. 4			
Museum News, No. 83			
Bulletin of the Metropolitan Museum of Art, Vol. 34, No. 4			
Sinica, Heft 1/2			
Bulletin of the Detroit Institute of Art, Vol. 18, No. 7			
Bulletin of the William Hayes Fogge Art Museum, Vol. 8, No. 2			
Bulletin of the Cleveland Museum of Art, Vol. 26, No. 5			